

1 ラヴェルストンのキース家の伝承歌

幻の牛の番をする

哀しき亡霊のつぶやきが聞こえる
「ああ ラヴェルストンのキース家の
あなたがうたう嘆きの詩^{うた}」

ラヴェルストン ラヴェルストン

5

朝陽に輝く丘を下り
朝露にきらめく草原を抜け
朗らかな小径がつづく

ラヴェルストン ラヴェルストン

10

木陰に捨て置かれた柵の踏み段
母親の牛の番をしていた娘
その娘がうたったあの歌よ

娘はうたい 牛の番をしていた

山査子^{さんざし}の根元に腰を下ろしたとき
ラヴェルストンのアンドルー・キースが
馬で通り過ぎた 月曜の朝のことだった

15

従者たちがうたい 鷹の鈴が鳴り響き

礼帯の宝石が光り輝く
ああ ラヴェルストンのキース家の
あなたがうたう嘆きの詩^{うた}

20

アンドルーが訪れたその草地に

今年もまた夕闇が迫りくる
かつて陽の光を浴びて娘が座っていた場所には
月明りに照らされて静かに亡霊が座っている

霧に霞む美しい髪とその娘が

25

幻の牛の番をする
ああ ラヴェルストンのキース家の
あなたがうたう嘆きの詩^{うた}

私は踏み段に手を置いた
捨て置かれ冷たくなった踏み段に 30
小川は何も語らず
さらさらと流れるだけ

だが旅人よ くる年もくる年も
ここでは娘が幻の牛の番をしている
ああ ラヴェルストンのキース家の 35
あなたがうたう嘆きの詩^{うた}

三步こちらへ アンドルーが立っていた場所へ
なぜそんなに怯えて青ざめる
これはただの古びた踏み段ではない
聞こえてくるのはただの小川のせせらぎではない 40

遠い昔から嘆きつづけ
娘は幻の牛の番をする
ああ ラヴェルストンのキース家の
あなたがうたう嘆きの詩^{うた}

(宮原牧子訳)